

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12809

研究課題名（和文）チベット仏教前伝期に至るインド後期中観派以降の止観論の研究

研究課題名（英文）A study on the theory of Zamatha and vipazyana from late Indian Mahayana Buddhism to the period of pre-Tibetan Buddhist transmission (snga dar)

研究代表者

佐藤 晃 (Sato, Akira)

早稲田大学・文学大学院・その他（招聘研究員）

研究者番号：60734754

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、後期中観派のカマラシーラ（8世紀後半）の止観論を起点に、チベット仏教前伝期に至る過程での受容と展開を検討するものである。特に彼からの影響が確認できるヴィマラミトラ（8世紀後半）著Rim gyis 'jug pa'i bsgom don (Rim gyis) とジュニャーナキールティ（9世紀頃）著*PAramitAyAnabhAvanAkramopadeza (PYBhKrU) を取り上げ、文献学的に解説することで、当時の止観論に関する思想展開の解明に寄与することを目的とする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、未だ研究途上にあるインド仏教からチベット仏教前伝期にかけての思想史研究について、仏教の修行論の中心にある止観論に関する文献学的研究により、その一端を明らかにすることである。本研究では、インド後期中観派のカマラシーラ（8世紀後半）の議論を起点に、ヴィマラミトラ著ラ（8世紀後半）著Rim gyis 'jug pa'i bsgom donとジュニャーナキールティ（9世紀頃）著*PAramitAyAnabhAvanAkramopadezaを取り上げ、両書のテキスト校訂及び試訳を行い比較検討し、当時の修行論を中心とする思想史の展開の一端を指摘した。

研究成果の概要（英文）：This study examines the acceptance and development of the theory on Zamatha and Vipazyana from late Indian Mahayana Buddhism around the 8th century to the period of pre-Tibetan Buddhist transmission (snga dar), and to contribute to the understanding of the development of thought at that time. This study compares Kamalasila's arguments with two treatises influenced by him: the first is Vimalamitra (late 8th century)'s Rim gyis 'jug pa'i bsgom don, and the second is Jnanakirti (ca. 9th century)'s *PAramitAyAnabhAvanakramopadeza.

研究分野：中国哲学、印度哲学および仏教学関連

キーワード：インド仏教 チベット仏教 後期中観派 止観論 カマラシーラ ヴィマラミトラ ジュニャーナキールティ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

インド仏教は、8世紀後半に本格的にチベットへ伝播するが、その中心的役割を果たしたのは、大乘仏教の中観派に属した諸論師であったと言えよう。以来、チベット仏教の教義上の中心には、常に中観派思想が置かれる。本研究では、その伝播において重要な役割を果たしたカマラシーラ (Kamalaśīla, ca. 745-790) の修行論、特に止観論の文献学的研究を基盤に据えて、チベット仏教前伝期 (842年まで) での止観論の受容と変容の思想史的解明を目的とするものである。

止観 (śamathavipaśyanā) とは、初期仏教以来の伝統的な瞑想法であり、基本的な修行方法として位置づけられる。後期中観派では、瑜伽行唯識派での展開からの影響等も受けつつ、止は非概念的な心的作用としての精神集中とされ、一方、観は止を為しつつ行う概念的思考として理解され、修行論の中心に置かれる。そして、それらの実践を通じて、諸事物の真理 (中観派にとっては「あらゆる事物は、固有の本性を欠くこと (=一切法空性/無自性性)」) を悟ることを目指す。カマラシーラは、同名の三篇の著作 *Bhāvanākrama* (以下、BhKr) 等の論書で修行体系論及び階梯論を提示しているが、彼の止観論を考察する際、特に「観」に注意を払う必要があると考えられる。というのは、その初期以来、中観派の思想的特徴として、言葉や概念の構想に対する懐疑があるが、観は言葉や概念を基盤とする心的作用であると言えるからである。また、カマラシーラは後期中観派に属した人物だが、その思想的特徴の1つに、ダルマキールティ (Dharmakīrti, 7世紀) によって大成された仏教論理学・認識論を受容し、議論の基盤とした。仏教論理学・認識論は自説の主張、また、他学派説の論破の基盤として考察され、整備されていた側面があり、それは論理・言葉・概念を重視する点で、中観派の基本的な立場と矛盾する思考体系であると言える。よって、そうした問題を抱えつつも、後期中観派は如何なる理論を用いて、整合性の取れた止観論を展開したのかを問う必要がある。これは後期中観派を引き継いだチベット仏教の思想史研究においても、論点となると考えられる。

止観論を含め、カマラシーラの修行論に関する諸議論は、チベット仏教後伝期 (1042年以降) に至るまで、しばしば言及または引用されてきた事実は、これまでも先行研究によって指摘されてきた。しかしながら、チベット仏教前伝期 (842年まで) に関しては、彼の影響を示す資料は必ずしも多くなく、また、そのことに関する検討及び分析も限定的であり、当時の思想史研究は未だ十分であるとは言えない。

2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究は、カマラシーラの修行論、特に止観論の理論に関する文献学的研究による検討を基礎として、チベット仏教前伝期に至るまでの止観論を中心とする修行論の受容と変容の一端を解明することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、まず、カマラシーラを中心に、インド後期中観派による止観論の基盤的理論の解明を基礎とする。止観は悟りを得るための手段だが、特に止観の機能に関する理論の抽出及び分析が課題となる。上記の通り、カマラシーラはBhKr等の修行論に関する著作を複数残しているが、彼はそれらの論書の中で止観の基盤となる理論については殆ど論じていない。その理論的分析は主著**Madhyamakāloka*（以下、Māl）や別の著作*Tattvasaṃgrahaḥpañjikā*（以下 TSP）の関連する議論を検討する必要がある。申請者は、これまで Māl を中心に空性／無自性論証の論理構造分析を進めてきたが、本研究では、止観論上の機能という観点から分析を行う。その際、止観の実践後に獲得されるヨーガ行者の直接知覚（yogipratyakṣa）や後得知（prṣṭhalabdhajñāna）に関する議論との関係も考慮し、検討する。

そして、カマラシーラ以降のチベット仏教前伝期に至る展開については、彼の論書からの影響が見られる2つの論書、ヴィマラミトラ（Vimalamitra, 8世紀後半）著 *Rim gyis 'jug pa'i bsgom don*（以下、Rim gyis）と、ジュニャーナキールティ（*Jñānakīrti, 9世紀頃）著 **Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa*（以下、PYBhKrU）を取り上げて、文献学的に両論書のテキスト校訂と試訳を行い、カマラシーラの議論との比較検討を行う。これらの論書は、いずれもチベット語訳しか残っていないが、明らかにカマラシーラからの影響を受けている。Rim Gyis は BhKr III を、一方、PYBhKrU は BhKr I を踏襲して著述されていることは明らかだが、いずれもカマラシーラの論書を参照していることについては明言していない。さらに、これらの論書は、カマラシーラとは異なる伝統をも引き継いでいる可能性やチベット仏教後伝期に至って引用・言及される点も確認できる。

4. 研究成果

主な研究成果は、ヴィマラミトラ著 Rim Gyis 及びジュニャーナキールティ著 PYBhKrU のチベット語訳テキストの校訂及び試訳を通じて得られた以下の諸点である。まず、Rim Gyis からは、以下のような点が確認できた。

- ・ Rim Gyis は、カマラシーラの BhKr III の議論構成を基本的に踏襲しながら、止観の実践体系を整理している。しかし、BhKr III の説明では不十分とみなされるような場合は、BhKr I 等の他の論書も参照し、議論の構成にも変更を加えている。
- ・ Rim Gyis の修行論に関する立場は、漸悟派であると考えられる。すなわち、段階を踏んだ修行を主張する立場である。Rim Gyis は、止観の議論を終えた後、頓悟派と思われる対論者との問答を展開している。こうした Rim Gyis 全体の構成は、カマラシーラの BhKr I を想起させるが、後半に示される問答の内容に差異があり、今後、検討を進めたい。

次いで、PYBhKrUからは、以下のような点が指摘できる。

- PYBhKrUは、カマラシーラの BhKr I の議論を基本的に踏襲しながら、止観の実践体系を整理している。
- 止観論に先立ち、修行者が起こすべき菩提心に関する議論を詳細に論じている。カマラシーラは BhKr I において菩提心を論じる際、シャーンティデーヴァ (Śāntideva, 7 世紀頃) が示す枠組み (誓願心と発趣心) で整理し議論しているが、PYBhKrU は同じ枠組みを引き継ぎつつ、さらに *Abhisamayālaṅkāra* が提示する枠組み (菩提心を 22 種に分ける) をも組み込んで論じている。なお、菩提心を 22 種に分類する方法は、カマラシーラの『般若心経』に対する注釈書でも言及されるので、同じ伝統にあると見ることができるが、カマラシーラはその上記 2 つの枠組みを組み合わせた議論を提示しておらず、そこに PYBhKrU に至る過程での展開が看取される。
- PYBhKrU の著者ジュニャーナキールティには、主著と思われる著書 **Tattvāvatārākhya-sakarasugatavācasamkṣiptavyākhyāprakaraṇa* (以下、TAA) という大部の論書がある。本書は顕教から密教へと至る修行階梯を論じるものであるが、顕教部分の内容は、PYBhKrU と全く同じであると言ってよい。あるいは、PYBhKrU は、顕教段階の修行者への指南書として、TAA の顕教部分を抜粋したものとすることもできる。いずれにせよ、ジュニャーナキールティに見られる顕教から密教に至るまでを総合的に整理する試みは、後の時代に登場するラムリム思想に通ずるものがあり、9 世紀頃においてはその顕教段階での修行論を構成する際、カマラシーラが整理した体系が影響力を持ち、踏襲されていたことが分かった。

以上の Rim Gyis 及び PYBhKrU については、本研究期間中にテキスト校訂及び試訳の作業を完成させることができなかった。主にカマラシーラとの影響関係を考慮し、校訂作業を進めてきたが、今後、同時代の *Abhisamayālaṅkāra* 系統の諸論書や後代の諸論書等との比較検討を進め、2023 年度より順次公開していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤晃
2. 発表標題 カマラシーラ 著 MadhyamakAloka推論節
3. 学会等名 帰謬論証（プラサンガ）研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------